

エンパワメント系 コミュニティチーム

小澤 亘

(産業社会学部教授)

○小澤 コミュニティチームの小澤です。今日は、チームリーダーの津止先生に急な出張が入りまして、私が報告を代行させていただきます。急なことで、今回は、チーム全体の報告としてではなく、私の視点からの個人的な報告になりますことを予めご了承ください。

「コミュニティプロジェクト」と、きわめて括りの大きなプロジェクト名称がついておりますが、先ほど「若者」とは何かといった問題提起もありましたのと同様に、「コミュニティとは、いったい、何か」という本質的な問いが提起されると思います。

すなわち、コミュニティと言っても、どのようなエリアなのか、どのようなグループ（アクター）を対象にするのか、どのようなアクションを問題とするのか、という基本的なことが問われます。こうした視点について、本プロジェクト参加メンバーが、必ずしも、一致した見解を持っているわけではありません。

そこで、私たちのプロジェクトの特徴を、他のプロジェクトとの相違点に注目して、一言で、申し上げますと、「一定地域空間（いわゆるコミュニティ）における多様なアクターの『相互の関係性』を把握し、それらの『連携』によって、社会問題の解決を考えていく」という社会学的なアプローチを取っている点にあるのではないかと思います。

私は、その中でも主としてボランティア活動に注目しておりますので、ボランティアに関連して、「対人援助学」の創生に向けて、問題提起を試みようと思います。

さて、中高生に、「ボランティア活動を良いことだと思いますか」と質問しますと、ほぼ100%の生徒が、ボランティア活動は良いことだと即答します。本音はどうかをいろいろ聞いていきますと、ボランティア活動はじつは嫌いだとか、偽善的だといった感じ方を持っている生徒もけっこうあります。ボランティア活動に対して、比較的多くの青少年が、ネガティブなイメージを抱いているというのが日本社会の特徴です。それは、いったい、なぜかというのが、私が直面している問題の一端です。

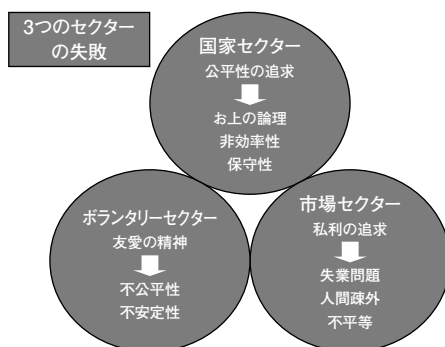
ボランティア活動にかかわって、有名な問題事例を一つ紹介いたしましょう。阪神大震災の折、多様なボランティアたちが被災地に向かいました。そうした中で、現地に受け入れられず、現地と摩擦を起こしたボランティアたちもしばしば見受けられました。すでに、被災者の一部が自営の商店を再開しようとしていたころ、あるうどん屋さんもようやく商売を再開し始めました。そんなとき、開店間もないその店の前の空き地で、外部からやってきたボランティアたちがいきなり炊き出しを始めました。こうしたボランティアたちは、被災地の人びとから、白い目で見られることになります。では、この場合、いったい、何が問題だったのでしょうか。

社会は、政府（公的）セクター、市場セクターと並んで、ボランタリーセクターがあり、この3つの仕組みによって、社会は成立しています。そして、それぞれのセクターには、セクターを支える特徴的な価値理念があります。市場セクターにおける価値理念は、言うまでもなく、私利の追求です。一人一人が私利を追求することによって、効率的な生産と消費の調整が可能と考えられるからです。「うどん」は適正な価格で、しかも、美味しくなければ売れません。それが、冷徹な市場の論理であり、そのために、日々、うどん屋さんは汗を流すのです。これに対して、政府セクターの価値理念は、公共性あるいは公平性の追求であり、市場セクターの競争原理の欠陥を補完しています。また、ボランタリーセクターは、友愛の精神によって、政府セクター・市場セクターによっては得られぬ、創意あふれる社会的貢献によって社会を支えているのです。

災害時に、一時、その機能を失っていた市場セクターが復活してくると、

食べ物、再び、市場の論理によって供給され始めます。そうした市場の秩序を無視することは、いかに高邁なボランティア精神によっておこなわれた行為（この場合は、炊き出し）であっても、それは営業妨害以外の何物でもないのです。

こう見てきますと、ボランティア活動の全てが善であると考えすることは明らかにきわめてナイーブな独善に他なりません。中高生に、こうした話をすると、「やってはいけないボランティア活動があるのか」とびっくりします。ボランティアは、けっして、私的な関係性によってのみ成り立つものではなく、優れて社会的な行為なのです。

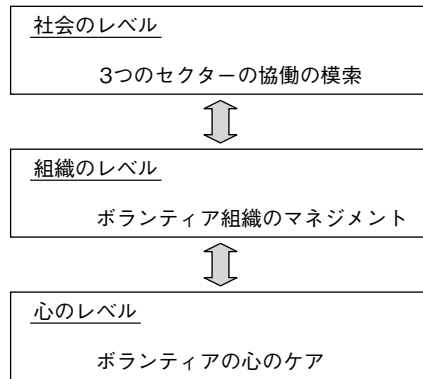


対人支援といった側面から、ボランティアという事象を見ていきますと、人を支援する具体的なレベルにおける個々人の心のレベルの問題（ミクロの問題）から、先ほど、提起しました社会全体のシステムにかかわる大きな問題（マクロの問題）、そして、その中間領域の組織の運営にかかわる問題（メゾレベルの問題）と、多層的に捉えていかざるをえません。

ボランティア活動が良いことか否かは、これらの多様な次元のそれぞれにかかわって、吟味していく必要があるのであり、ミクロからマクロにわたるたいへん間口の広い問題であることが理解できます。

こうした理解に立って、ボランティア領域から対人援助学の問題圏を考えていくと、まず、浮かんでくるのは、専門職としての「ボランティアコーディネーター」の在りようを先の3つの次元において究明していくという問題

ボランティア問題の3層構造



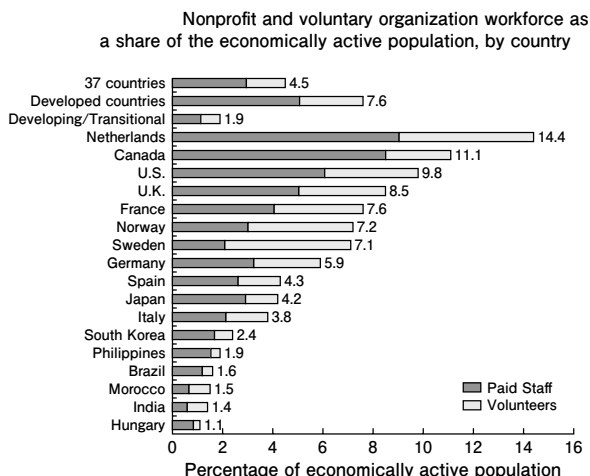
です。こうした問題意識は、阪神淡路大震災時の反省から生まれ、その後、「ボランティアコーディネーター養成」というテーマが、学会やボランティア関係者などによって追究されてきました。私たちのプロジェクトも、当然、こうした問題意識を共有しています。

もう一つの問題意識は、ボランティアを文化の視点から見て、ボランティア活動を生み出していく「文化装置」がいかなるものか、いかなるものであらねばならないかを究明していくことです。ボランティアという行動様式も、人びとのなかに育まれていく「文化」の一つであるからです。これに関しては、近年、「サービスマーケティング」という教育プログラムが、日本においても、注目されており、本学のボランティアセンターでも、大学における「サービスマーケティング」のあり方を研究課題として取り組んでいます。つまるところ、これらの問題意識は、ボランティア活動を生み出していく「文化装置」を教育のなかに、いかにビルトインしていくかという発問に他なりません。こうした「ボランティア」と学びの関係性にかかわる問題意識においても、先に見た3つの次元に注目しながら、考察を深めていく必要があると思われます。

ところで、私の視点は、ボランティア文化の国際比較によって、各国のボランティアにかかわる文化装置の特色を明らかにしていこうというものです。つまり、文化の問題である以上、一つの文化の中に埋没していたのでは、

文化を「文化」として認識できないからです。具体的には、日本、韓国、カナダの大学生や高校生に注目して、ボランティア意識調査（1回は高校教員調査を含む）をここ10年間ほど継続してきました。

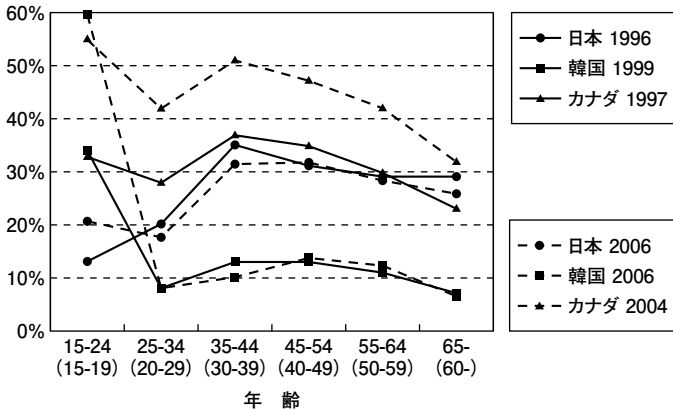
引き続きまして、私の研究の一端を紹介しながら、「対人援助学」に対して、若干、コメントしていきたいと思います。



上図は、各国の労働力人口において、ボランティアセクターがどの程度の割合を占めているかを、示したものです（Michael H. Hall, Cathy W. Barr, M. Eswaramoorthy, S. Wojciech. Sokolowski and Lester. M. Salamon, *The Canadian Nonprofit and Voluntary Sector in Comparative Perspective*. (Toronto: Imagine Canada, 2005) より）。

トップは、オランダで、第2位にカナダがつけています。こうして分かるようにカナダは、世界でもボランティアセクターが発達した先進国だと捉えることができます。カナダと比較すると、日本あるいは韓国は、その規模は1/3あるいは1/5程度にすぎません。日本の数値は、私立大学を含んでいますので（これに対して、カナダでは、公立大学が一般的）、本来的なNPO人口はもう少し下回るはずです。つまり、日本も韓国も、いまだボランティアセクターの発展途上国と位置づけることができるでしょう。

世代別ボランティア活動参加率の国際比較



つぎに、上記のグラフは、各国の公的データから、ここ10年ほどの世代別ボランティア活動参加率の変化を見ようとしたものです。これを見ていきますと非常におもしろい特徴が見られます。もちろん、参加率の定義は、各国により異なり、そもそも国際比較は難しいのですが、そういった難しい説明は、今日は、省くとして、著しい特徴点だけ見ていきましょう。カナダの場合は、どの世代においても、30%程度のボランティア参加率を保っており、それは、男女で差はありません。しかも、7年間でボランティア参加率の向上が見られます。これに対して、韓国（ただし、年齢の表記は、横軸の下段カッコ内の数値）は、15歳から19歳は高い参加率を誇っており、この7年間において、さらに数値を上げていますが、20歳以上の世代でのボランティア参加率は、この公的データではあまり変化が見られません。これに対して、日本は15歳から24歳および25歳から35歳の若年層で、数値は非常に低いのですが、35歳以上では一定程度の参加率を保っています。近年、15歳から24歳の層で、数値に若干向上の傾向が見られますが、それは韓国やカナダほどではありません。

ここ10年ほどの各国の世代別ボランティア参加率の変化の背景には、下表に整理したように、とりわけ中等教育課程におけるボランティア教育の仕組

みの変化があります。いわば、ボランティアと教育に関して言えば、この10年間はこの3カ国にいずれにおいても、激変期に当たっていたと言うことができます。

「ボランティアと教育」3カ国略年表

- 1994年 韓 中央日報キャンペーン
ソウル市教委中学年間40時間義務化
- 1995年 韓 総合生活記録簿の導入
- 1998年 日 NPO法の成立
- 1999年 加 オンタリオ州高校40時間義務化
- 2000年 日 「奉仕義務化」論争
韓 高校第7次教育課程開始
- 2007年 日 東京都高校「奉仕」必修化

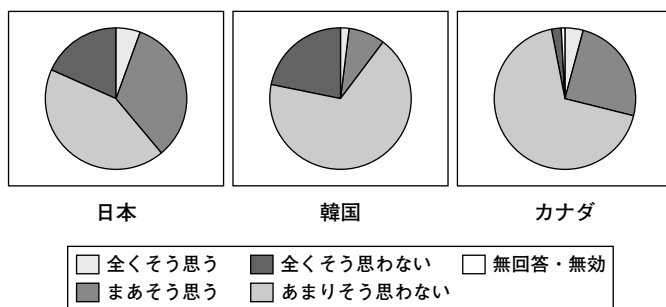
たとえば、韓国においては、1994年から青少年に対するボランティア義務化が議論され、ソウル市教育委員会がその制度化を打ち上げます。そうした衝撃が全国に波及し、2000年からは、正式な全国的なカリキュラム改定が行われています。ボランティア活動を義務化は、じつは、世界的に見ても大きなムーブメントとおさえておくことができます。カナダにおいても、オンタリオ州において、1999年に高校卒業要件としてボランティア活動時間を40時間とするという法制化が行われ、翌年から実施されています。日本では、2000年に社会奉仕活動義務化論争が起こったことは記憶に新しいところですが、2007年春からは東京都において、「奉仕」科目が置かれ、必修化されています（実態は、全員の履修が目指されるに留まる）。

私は、こうしたボランティアと教育の激変期を捉え、各国の生徒と教員の内面世界にアプローチして、ボランティアに対する意識の変化の把握に努めてきました。ここでは、ボランティアイメージに関する調査とボランティア活動における学びの効果の認識についての調査について、データを紹介しておきます。

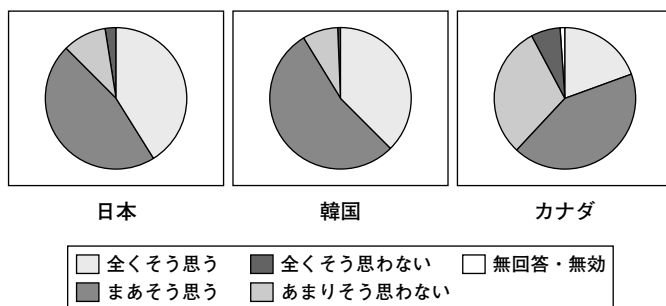
まず、ボランティアイメージについて、2000年に実施した大学生を対象とする調査をご覧ください。これらのデータからは、教育制度変容の影響をこうむっていない時点における青少年のボランティア意識の実態を把握できます。日本データで驚くのは、3割程度の学生が、ボランティアを偽善とイメージしていたことです。また、ボランティア活動を強く楽しいとイメージする学生も、カナダに対して、ボランティア後進国の日本・韓国では、数値がかなり低かったことが分かります。

大学生のボランティアイメージ（2000年）

「偽善的」

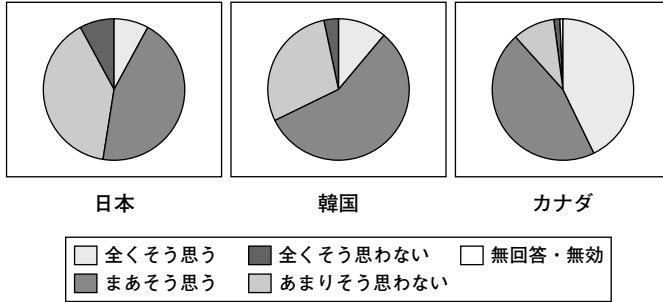


「困った人を助ける」



大学生のボランティアイメージ（2000年）

「楽しい」



こういった2000年の青少年のボランティアイメージを基盤としながら、それ以降、高校生を対象として、3カ国のボランティアイメージの変化を継続的に調査してきました。下表は、2007年高校生調査と2000年大学生調査とを比較したものです。

生徒のボランティアイメージ変化（単位：%）

ボランティアイメージ	国別	大学生（2000年度）		高校生（2007年度）	
		そう思う	そうわない	そう思う	そう思わない
自己犠牲	日本	35.4	64.6	32.7	67.3
	韓国	80.8	19.0	73.6	26.4
	カナダ	51.9	46.9	53.7	46.3
偽善的な	日本	38.5	61.4	32.8	67.2
	韓国	10.4	89.4	32.6	67.4
	カナダ	4.9	92.6	17.0	83.3
人気のある	日本	31.2	68.8	12.7	87.3
	韓国	18.6	81.4	32.9	67.1
	カナダ	37.4	61.3	45.4	54.6
強制的な	日本	8.1	91.9	14.2	85.8
	韓国	10.4	89.4	30.0	70.0
	カナダ	12.3	86.4	67.5	32.5

この表を見て行きますと、当初、ボランティアに対して、「偽善的」というイメージを持つ者が5%に満たなかったカナダにおいても、17%の生徒がそうしたイメージを持ち始めていることが分かります。韓国でも、同様な傾向の変化がありました。また、「強制的」というイメージでも、両国において、そう思うと答えた者は格段に増加しました。これは、先にも述べましたように、ボランティア活動義務化の影響です。しかしながら、他方で、「人気がある」というイメージに注目すると、カナダ・韓国とも、その比率は増加しています。これに対して、日本におけるボランティア人気の低下には目を覆うばかりです。若年層において、こうした問題を日本社会は抱えているのです。

ところで、さらに、下表において、ボランティア関心と各ボランティアイメージの相関係数を見ていきますと、各国の青少年のこころの内なるボランティア文化が見えてきます。たしかに、ボランティア＝偽善的というイメージは、ボランティア関心を低下させていますが（なかでも日本の相関係数は他国に比して高い）、「強制的」というイメージは、カナダでは、ボランティア関心と無相関となっています。つまり、「強制的」というマイナスイメージの増加は、必ずしも、若年層の実際のボランティア志向性には影響を与えていないのです。この点に、ボランティア先進国カナダの本領を見ることができでしょう。

ボランティアイメージと関心の相関係数（2007）

イメージ項目	日本	韓国	カナダ
自己犠牲	-0.250**	0.123**	-0.116**
偽善的な	-0.333**	-0.232**	-0.185**
困った人を助ける	—	0.246**	—
強制的な	-0.235**	-0.294**	—
冒険的な	0.198**	0.232**	0.334**
知識や経験が生きる	0.379**	0.358**	0.240**
楽しい	0.486**	0.494**	0.460**
おせっかいな	-0.249**	-0.404**	-0.328**
自分が成長する	0.376**	0.394**	0.271**

**は有為水準0.1%以下、*は1%以下、無印は5%以下

ボランティア＝自己犠牲というイメージに注目すると、韓国でのみ、相関係数がプラスになっています。韓国では、「自己犠牲」といったイメージが、ボランティア関心を促進していく傾向が見られるわけです。「困った人を助ける」というイメージでも、韓国でのみ正の相関係数となっています。韓国の青少年は、共同体意識が強く残るメンタリティーを持つことが明らかとなります。たとえば、こういった数値化によって、見えない文化を可視化すること、つまり、ボランティア文化を可視化することができるのです。

私のプロジェクトでは、もう一つの特色として、「学び」の側面からボランティア文化に接近しています。具体的な学びの効果としては、以下の表のような、11通りの学び概念を類型化しました。

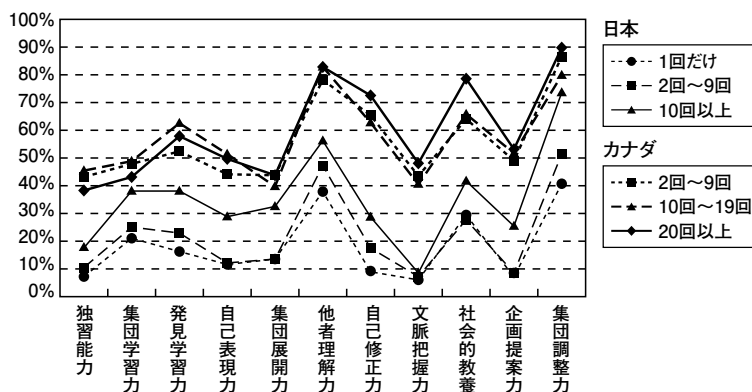
「学び」の11類型

- 独習能力：ひとりで学習する力
- 集団学習力：みんなと一緒に学習する力
- 発見学習力：自分で問題を発見する力
- 自己表現力：意見をまとめて話したり書いたりする力
- 集団展開力：グループの意見を調整、方向づけたりする力
- 他者理解力：相手の意見や相手の立場を理解する力
- 自己修正力：自分の意見を修正し、グループに協調する力
- 文脈把握力：新聞や本を読んで、論文や文脈を把握する力
- 社会的教養：社会を政経文など広い視点から見る力
- 企画提案力：新たな企画を提案する力
- 集団調整力：さまざまな人たちと『つながり』を作っていく力

この詳しい説明は省きますけれども、日本の大学生を対象とする2000年ボランティア意識調査から、ボランティア活動において、彼らが認識している「学び」の効果を、ボランティア回数とクロスして表したのが下のグラフです。まず、ボランティア回数が増えれば、さまざまな学ぶ力がついたという実感も高まります。日本とカナダのデータを比較して、グラフの折れ線の形がよく相似していることが分かりますが、この点から、ボランティアという行為が学びについて、普遍的な影響力を持っていることが判明します。

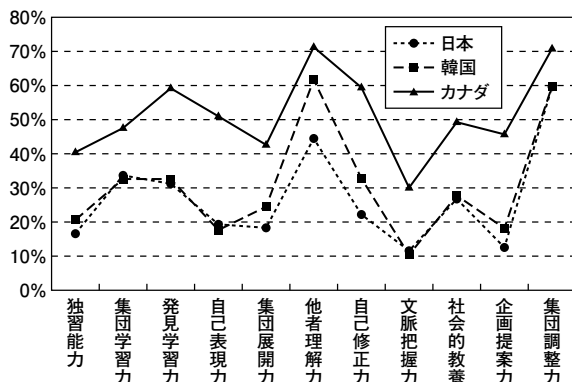
しかし、仔細に見ていくとそれぞれの国の特徴が浮かんできます。とりわけ、日本の特徴として注目しておきたいのは、第1に、文脈把握力という学びの要素が、ボランティア活動に見られないこと、第2に、企画提案力という学びの要素においては、カナダに比して、評価が低いものの、ボランティア回数が増加するにしたがって、その改善が見られることなどです。

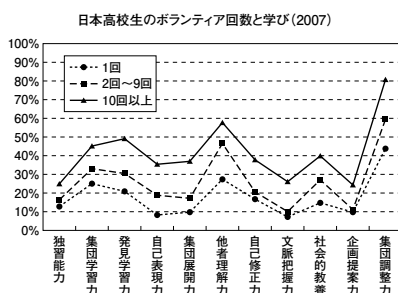
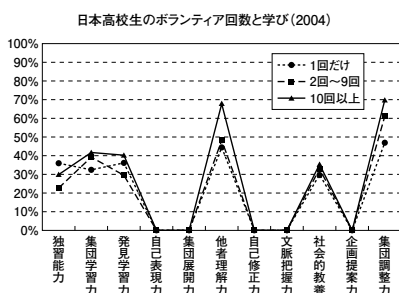
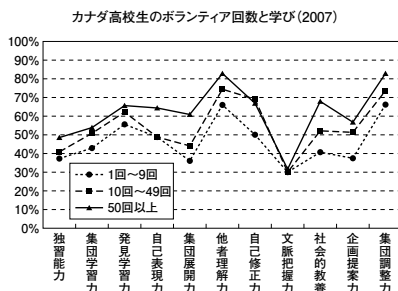
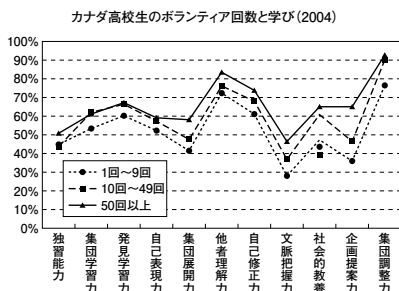
ボランティア活動と学びの効果(2000年大学生)



高校生を対象とする2007年調査で、3カ国のボランティア活動における「学び」の認識のデータをまとめたものが、つぎのグラフです。カナダにおけるこれらの数値は依然として高く。日本の数値は、韓国を下回っています。

2007年度3カ国高校生のボランティアと学び





さらに、ボランティア活動回数とのクロスを、カナダ・日本において、2004年、2007年と経年比較してみると、この間のボランティア教育の影響の実態が明らかになってきます。カナダの場合、こうしたデータで見ると、ボランティア教育の質が必ずしも高くなっているとは言えず、プログラム運営の質は、不安定であることが明らかです。カナダのボランティア研究者が、カナダの高校ボランティア教育がカリキュラム内にプログラムとして置かれておらず、ボランティア教育の中身は学校や担当者や受け入れ地域団体により、大きく異なると指摘していますが、まさに、そうした実態がグラフに現われています。

これに対して日本の場合は、2004年に、一度、ボランティア教育の質がひどく落ちていることが分かります。これは、ちょうど、総合教育が導入された第1期生なのですが、一時期、学校教育が混乱したことが推察されます。その後、総合教育が、次第に、定着してきたのか、2007年のデータでは、

2000年大学生データよりも、さらに良い結果、つまり、どの学びの要素でも、ボランティア回数にしたがって、向上していくという結果となっています。

では、教員のボランティア活動における「学び」における効果の認識はどうなのか。それについては、2004年に、4カ国において教員に対しても、ボランティア意識調査を試みしたので、その調査結果を次頁のグラフにまとめてみました。

カナダの高校教員の認識を見ていきますと、やはり、どの学びの項目においても、高い評価となっています。これに対して、韓国と日本は、「独習能力」「集団学習力」という2つを除き、きわめてよく似たグラグの形をしていることが分かります。こうした教員の認識が重要な意味を持つのは、そのデータを生徒のデータと比較すると理解できます。

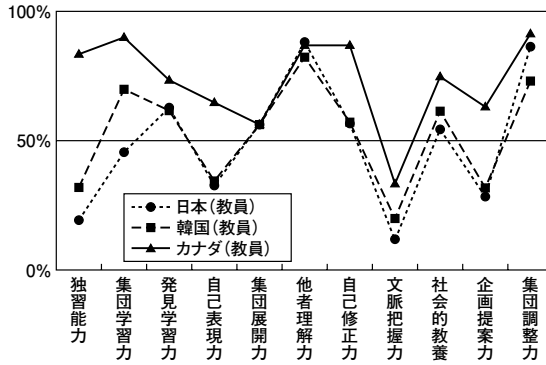
2004年教員調査と2007年高校生調査から、2つのデータを組み合わせ、カナダと日本におけるボランティアの学びの効果に関して、生徒・教員の認識フレームを比較してみましょう。

当然と言えば、当然ですが、いずれの国においても、教員の認識フレームが生徒の認識フレームを規定していることがはっきりと分かります。また、日本の場合、教員の認識フレームが生徒の認識フレームを規定はしているけれども、生徒の認識が依然として低く、両者に差があることも明らかとなります。

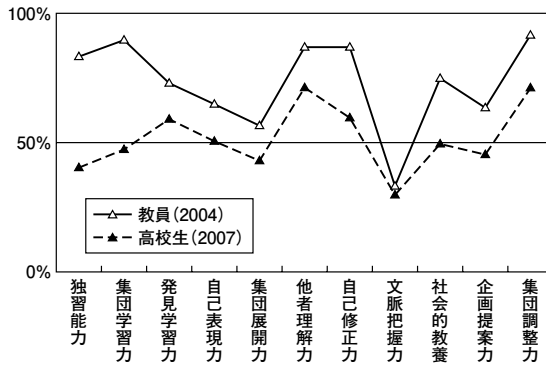
私の調査の目的は、こうしたアプローチによって、「ボランティア文化」涵養の文化装置としての学校教育あるいはNPOを含む地域教育の中身进行分析していくことでした。ここでは詳述できませんが、一連の調査によって、日本社会においては、青少年が地域社会（コミュニティ）から根こぎをされており、ボランティアイメージの悪化を招いていること、とくに、男子のボランティア意識が低く、この点において性差が際立っていることなど、多くの問題点が浮かび上がってきます。

今後、こうしたボランティア文化の比較分析を、総合的な比較社会の観点からアプローチしていく予定です。そのために、今年1月にはボランティアと教育に関する日韓加の国際シンポジウムを開催し、その際に、共同研究ブ

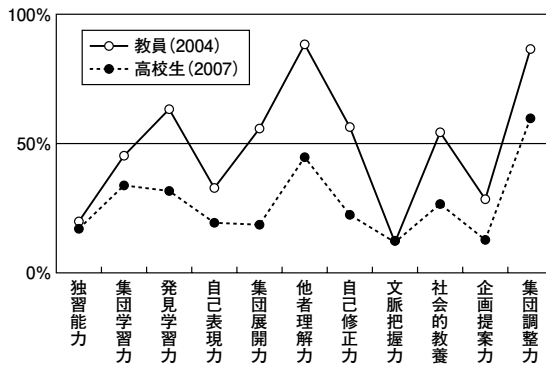
3カ国教員のボランティアと学びに対する認識



カナダ:教員と生徒のボランティア学び認識



日本:教員と生徒のボランティア学び認識



プロジェクトを立ち上げ、比較研究を継続していくことになっています。

東京都が、2007年4月から、「奉仕」科目において、奉仕活動の実践を必修修化しましたことは先に述べましたが、まさに、高校教育における文化装置の在りようが、現在、日本において、鋭く問われていると言えるでしょう。いままでの調査研究を基盤として、こうした日本社会が直面する問題を引き続き、研究していくつもりです。

さて、以上の研究経過にもとづき、対人援助学の創生にかかわって、最後に一言しますと、ボランティアも失敗するわけであり、こうした失敗をいかに捉えるか、そして、それをいかに乗り越えていくかが、私たちの問題関心からは大きなテーマになると考えます。

教育の変革、つまり、ボランティアの義務化による失敗も危惧される状況にあります。こうした失敗を乗り越えていくためには、学校教育の中身や地域社会側の受け入れのあり方といった日本社会におけるボランティア文化を支えている文化装置を仔細に吟味していくことが重要です。もちろん、先に指摘したように、ボランティアコーディネーターという専門職のあり方（つまり、人側の問題）の検討も必要不可欠ですが、文化の次元の問題もボランティアの失敗を乗り越えていくうえで、きわめて重要な検討課題であると言えるでしょう。

○**司会** どうもありがとうございました。それでは、質問はありますでしょうか。

○**質問者** どうも貴重なお話をありがとうございました。大変参考になりました。一つ、御質問させていただきたいのですが、「ボランティアがどのように失敗するのか」ということに対する着目には非常に興味を持ちました。それに関して提案ですが、たとえば、ボランティア活動を失敗して、うまくいかないという体験をされた方がいる場合、その方がそうした失敗体験を乗り越えて、より良いボランティアのあり方を発見していくというようなプロセスを明らかにする研究も、このプロジェクトにとって、意味があるのではないのでしょうか。

○**小澤** ボランティアの失敗に対する研究については、津止先生が、『ボラ

ンティアの臨床社会学Ⅱ』（人間科学研究所、2008年3月）などにおいて、実証的な研究が進められております。つけ加えておきますと、「ボランティアコーディネーター養成プログラム」は、本学においては、10年近く実施されており、現在、ボランティアセンターが担当しております。そこでは、ボランティアコーディネーター学をいかに立ち上げていくかが大きなテーマとなっています。また、サービスマネジメントに関しては、桜井先生が、本プロジェクトのなかで研究を進められています（『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房、2007年3月などを参照されたい）。

○質問者 どうもありがとうございました。